

ドイツ統一後における東ドイツ教育学の 評価に関する研究動向

吉田成章

(2006年10月5日受理)

Die Tendenz der Studien über die Bedeutung der DDR-Pädagogik
nach der deutsch-deutschen Vereinigung

Nariakira Yoshida

Der Beitrag versucht die Tendenz zu untersuchen, wie die DDR-Pädagogik nach der deutsch-deutschen Vereinigung bedeutet sein, und dann die Gesichtspunkte zu klären, wie die DDR-Pädagogik bedeutet sein muß. Hierbei ich ordne die Tendenz in die vier Aspekte, auf der ich die Literaturen und Archive zu diese Probleme anordne.

- 1) Die Tendenz der Vergleichendpädagogischen Studien
- 2) Die Tendenz der Bildungsgeschichtlichen Studien
- 3) Die Tendenz der Schulpädagogischen Studien
- 4) Die Tendenz der Rückblickende-biografischen Studien

Auf Grund dieser Aspekten klärt ich die Aufgabe, daß die DDR-Pädagogik nicht nur angesichts der Unterschied zwischen die Positionen von West-Pädagogen und die von Ost-Pädagogen, sondern auch angesichts der Unterschied zwischen die Positionen von Ost-Pädagogen bewertet sein muß, daß man DDR-Lehrplanwerk mit Recht bewerten müssen, daß Alltag in der DDR-Schule auf Rückblickende-biografische Studien ins Klare gebracht werden muß.

Stichworte: DDR-Pädagogik, DDR-Didaktik, deutsch-deutschen Vereinigung

キーワード: 東ドイツ教育学, 東ドイツ教授学, ドイツ統一

I. 問題の所在と研究の方法

本研究の目的は、統一後ドイツにおける東ドイツ教育学の評価に関する研究動向を明らかにすることである。

1990年10月3日、東ドイツが西ドイツに編入される形で、ドイツ統一が成立した。ドイツ統一後、そもそも社会主義における教育とは何であったのか、東ドイツの教育をどう評価するのか、ということがすぐさま大きな議論の対象となった。統一後のドイツにおいて、東ドイツ教育学をどのように評価するのかということが、ドイツ教育学の発展にとって大きな課題とされてきている。このような課題は、東ドイツ教育学に少な

からぬ影響をうけてきたわが国の教育学にとっても、重要な課題である¹⁾。

わが国においても、統一ドイツへの「転換(Wende)」によって東ドイツ地域の教育がどのように変わったのかということについての、教育制度に関する研究²⁾や、学校の内実に関わるカリキュラムに関する研究³⁾、さらに東ドイツの教育・教育学者が「転換」によってどのような道をたどったのかということに関する研究⁴⁾などが行われている。また、東ドイツにおけるイデオロギー的政策によって表舞台から消えてしまった教育学者の教育学理論を、哲学的視点から捉え直そうとした研究⁵⁾や、ベルリンのフンボルト大学がどのように「清算」されることになったのかに関する研究⁶⁾など

もなされている。

本研究では、統一後ドイツにおける東ドイツ教育学の評価に関する研究の動向を整理し、統一後ドイツにおいて東ドイツ教育学はどのように評価の組上に上がってきているのかを明らかにすることを目的とする。その上で、わが国において東ドイツ教育学を評価するための展望と課題を明らかにする。というのも、ドイツにおける研究動向を整理する試みは、1998年にクロア (Cloer, E.) によってなされている。しかしながら、その整理はクロアの専門である教育史的研究に対象が限定されていること、さらに整理されているのは1998年までのものであるという限界を指摘しなければならないからである。

したがって本研究では、統一後ドイツにおける東ドイツ教育学の評価に関する研究動向を、大きく次の四つのテーマに即して整理する。すなわち、比較教育学的研究、教育史的研究、学校教育研究、回顧的・伝記的な研究である。本研究では、以上のような四つの視点からドイツにおける研究動向を整理することによって、東ドイツ教育学をどのように評価するのかということに対する示唆を得たい。

II. 東ドイツ教育学の評価に関する研究動向 — 四つの視点から —

1. 比較教育学的研究の動向

東ドイツにおける教育と西ドイツにおける教育との比較研究という分野は、ドイツ統一以前から両ドイツにおいてなされてきた研究分野である。だからこそ、ドイツ統一後の東ドイツ教育学の評価について、まず反応を示したのが比較教育学の研究者たちであった。統一以前から東ドイツ教育学について研究してきた西ドイツの比較教育学者アンヴァイラー (Anweiler, O.) は、1990年には東西ドイツの教育の比較に関する著書⁷⁾を編集している。アンヴァイラーはさらに、中央・東ヨーロッパ地域における教育改革の一つとしてドイツにおける「転換」について研究している⁸⁾。また、西ドイツの比較教育学者であり世界的に活躍しているミッター (Mitter, W.) が編者を務めたシリーズ本では、ジョン (John, B.) が東ドイツにおける比較教育学の歴史を、マルクス-レーニン主義的なイデオロギーと教育学との関係として描いている⁹⁾。

ドイツ統一後には、統一以前にはなされなかった両ドイツの研究者間での対話 (Dialog) がテーマとなり、東ドイツの教育学者と西ドイツの教育学者との共同研究による研究が出版され始める。1992年には1990年秋に行われた学校実践と教育科学に関する会議での議論

が『東の学校-西の学校』¹⁰⁾としてまとめられ、東西両国出身の研究者の論文が掲載されている。

1994年には、クロアらによって、東西両国の研究者の論文がまとまって編集される¹¹⁾。さらに前年のシンポジウムを論文集としてまとめる形でホフマン (Hoffmann, D.) とノイマン (Neumann, K.) 編集による三巻本が、一年ごとに出版される¹²⁾。同書では、東西ドイツにおける教育学・教授学の発展の比較から、東西ドイツそれぞれの研究者による自国の教育学のふりかえりまで、幅広い論文を掲載している。

その他にも、東ドイツにおける教育制度をスローガン (Stichwort) から考察した研究¹³⁾や、東ドイツにおける教育制度の転換を多くの文書・資料 (Dokument) から考察した研究¹⁴⁾、教育と労働力との関係から東西ドイツの学校発展について比較検討した研究¹⁵⁾などがなされてきている。

ドイツ統一後の比較教育学的立場からの研究として、ドイツ統一以前と比べて注目しなければならない点は二点ある。一つは、東ドイツにおける教育に関する文書の大部分が公開されたことである。このことによって、東ドイツの教育に関する資料が大幅に増え、研究の量・質ともに上昇した。いま一つは、先述したとおり東ドイツ出身の研究者と西ドイツ出身の研究者との物理的対話が容易になり、彼らの共同研究による比較研究がなされるようになったことである。またこのことは、一部の研究者に限られていたとはいえ、ドイツ統一に際して行われた東ドイツ教育学者の研究職からの追放による研究活動の停止に対して、研究発表・自己弁明の場を与える機会ともなった。

2. 教育史的研究の動向

教育史的立場から見た東ドイツ教育学の評価研究において大きなテーマとなっているものが、そもそも東ドイツ教育学とはなにをさしているのか、ということである。それは、ソビエト教育学と東ドイツ教育学との関係、および改革教育学と東ドイツ教育学との関係に関する、東ドイツ教育学の範囲をめぐる議論である。

まず、ソビエト教育学と東ドイツ教育学との関係については、東ドイツ出身の教育史研究者であるゲルト・ガイスラー (Geißler, Gert) が、個人研究においても、同じく東ドイツ出身のヴィーグマン (Wiegmann, U.) との共同研究においても、東ドイツの教育史をソビエト占領地域における教育との関係を重視しながら多くの研究を現在に至るまで発表している¹⁶⁾。またソビエトと東ドイツにおける教育学論争については、それを「忘れられた教育学論争」として考察した、西ドイツの教育史家であるベンナー (Benner, D.) とスラーデ

ク (Sladek, H.) の研究が挙げられる¹⁷⁾。

次に、改革教育学と東ドイツ教育学との関係については、ドイツ社会主義統一党 (SED) による改革教育学批判により、表面的には50年代初頭には東ドイツ教育学の舞台から改革教育学は消えてしまうということになっている¹⁸⁾。しかしながら、改革教育学を両ドイツの教育学の伝統的遺産として捉え、東ドイツにおける改革教育学の受容に関する研究や、東ドイツ教育学を今なお続く改革教育学として捉えた研究などが、東西どちらの研究者からも多くなされている¹⁹⁾。

また、この二つのテーマ以外にも、マルクス主義をどう受けとめるのかというテーマに関する研究²⁰⁾や、東ドイツにおけるカリキュラム史に関する研究²¹⁾、東ドイツ教育における「独裁 (Diktatur)」や学校日常の政治化をテーマに東ドイツ教育史について考察した研究²²⁾、ドイツにおける教育史大系の一部として東ドイツ教育史についてまとめられた著書²³⁾などが挙げられる。さらに、1992・1997・2002年の教育学年鑑においても、東西ドイツの転換と教育との関係に関する特集で論文がおさめられている²⁴⁾。

最後に、統一以前から東ドイツ教育学に関する研究を行ってきた西ドイツの教育史研究者の研究動向について述べる。彼らの研究関心は、ドイツ統一までになされてきた研究では、東ドイツ教育学は「国家教育学 (Staatspädagogik)」であると一面的に断ぜられてきたのに対して、東ドイツ教育学における教育学アプローチの「多元性 (Pluralität)」を主張し、「反省的な教育学のアプローチ」を見出すことの重要性の指摘にあった²⁵⁾。この東ドイツ教育学の発展の「多元性」は、同じく西ドイツの教育史家であるクロアによってより具体的に検討されるキーワードであり²⁶⁾、それは東ドイツの教育学者の言説²⁷⁾においても認められる。彼らはこのような主張によって、東ドイツ教育学の「決算 (Bilanzierung・Bilanz)」と、統一後ドイツにおける教育学理論の再構築に取り組んできている²⁸⁾。

3. 学校教育研究の動向

東ドイツにおける学校教育の内実に関わる研究動向を整理すると、それは以下の四つのテーマに分類される。第一に、ポリテフニズム教育に関して、第二に、一般陶冶に関して、第三に一般教育学に関して、第四に一般教授学に関して、である。

まず、教育と労働との結合を目指した、社会主義教育学の中心的構想の一つである、ポリテフニズム教育については、ライショック (Reischock, W.) によるものが挙げられる²⁹⁾。ポリテフニズム教育は、統一後の学校制度においてはなくなってしまった構想である

が、彼はそれをいまだ解決しない教育学上の課題であるとして議論している。

次に、「全ての成長しつつある社会の構成員に同じように獲得され、あらゆる本質的な文化領域からの陶冶内容の伝達と習得を含む教育」³⁰⁾である一般陶冶の構想に関する研究としては、東ドイツ時代の一般陶冶に関する文献を丹念に検討したハウステン (Hausten, H.-J.) の研究³¹⁾や、ノイナー (Neuner, G.) の研究³²⁾などがあげられる。特に、25年にわたって東ドイツ教育界において指導的役割を果たし、研究者としても知られていたノイナーが、学習指導要領 (Lehrplanwerk) の理論との関連において、一般陶冶に関する理論を統一後どのように振り返るのかは注目されてよい。この点については、ノイナーの75歳の誕生日にあわせて、彼の一般陶冶の構想に関する論文集³³⁾が出版されるなど、ドイツにおいても近年注目されてきている。

続いて、一般教育学に関する研究として、教育学アカデミーの元所員であったアイヒラー (Eichler, W.) によるものがあげられる³⁴⁾。特に彼は、「体制的『号令教育学』のもとでの1980年代後半の教育研究を『シジフォスの作業』にたとえながら、転換後はシジフォスが断崖の上までかつぎあげ、引き落とされ、またそれを背負った『石』すら見あたらぬ環境」³⁵⁾と告白している。その主張には、東ドイツにおける一般教育学の発展全体の中で石を積み上げ、1980年代の教育研究では石を積んで崩される状況の中にあり、統一後は積み上げてきたその石すら見あたらぬ状態であるという、強い皮肉と批判がこめられている。

最後に、一般教授学に関する研究については、教師の指導と自己活動に関する評価と今日の意義について、1980年代における実践を報告するかたちで考察したもの³⁶⁾、指導概念の再検討を通して教育的な指導について考察したもの³⁷⁾、学位論文として歴史的な考察や東ドイツの研究者のインタビューを交えながら指導と教育、自己教育と自己活動について論じたもの³⁸⁾などが挙げられる。また、授業方法について東ドイツの代表的著作を挙げながら考察した研究³⁹⁾や、1980年代において注目を浴びたコミュニケーション教授学の視点から授業におけるコミュニケーションと協働について論じた研究⁴⁰⁾も挙げられる。西ドイツの研究者によるものとしては、東西ドイツにおける教授学がどのように分化していったのかについて考察した研究⁴¹⁾などが挙げられる。

4. 回顧的・伝記的研究の動向

ここでは、東ドイツ出身の研究者が東ドイツ教育学をどのように振り返っているのかに関する研究動向

と、伝記的・記述的手法による東ドイツ教育学に関する研究動向について検討する。

まず、東ドイツ出身の研究者による研究動向であるが、これまですでに述べてきたように、比較教育学・教育史・学校教育のそれぞれの分野においてなされてきている。ここではそれ以外の研究動向について述べる。まず、ドイツ統一後の東ドイツ教育学の評価に関する最初の本格的著作とされる⁴²⁾シュタインフェル(Steinhöfel, W.)編集の論文集である『東ドイツ教育学の足跡』⁴³⁾が挙げられる。また、東ドイツにおいて、「子ども(Kindheit)」はどのように捉えられ、「子ども」をどのように育てようとしてきたのかということに関して、東ドイツ教育の現代的意義を多角的視点から問い直した論文集⁴⁴⁾も出版されてきている。

これらの理論的な振り返りだけではなく、東ドイツにおける実践や学校での試みについての回顧的な研究⁴⁵⁾が近年出版されている。同書においては、基盤となった理論と、それに基づいてどのような実践がなされたのかについて、記述的にまとめられている。

また、統一以前の中心的研究機関であった教育学アカデミーに関する研究⁴⁶⁾、同アカデミーが発行していた『教育学』誌に関する研究⁴⁷⁾もなされている。『教育学』誌は1990年秋に『教育学と学校日常』誌へとその名を変え、統一後は西ドイツの研究者の論文も積極的に掲載するなど、新たな出発を切ったものの、結局は1996年秋にはその歴史に幕を閉じることになる。

最後に、教育学研究の中でも比較的新しい手法である、伝記的研究の動向についてみてみる。ドイツにおいてこの研究分野において積極的に活動しているのが、クリューガー(Krüger, H.-H.)とマロツキ(Marotzki, W.)のグループである。彼らは1995年の共同の編著において、教育学研究において伝記的研究を位置づける試み⁴⁸⁾をしながらも、その手法によって東ドイツにおける学校の日常を明らかにしようとする試みにも力を入れている⁴⁹⁾。

彼ら以外の研究としても、子どもたちの中の心理的葛藤を分析した研究⁵⁰⁾、子どもとのインタビューを通して子どもが「転換」をどのように経験したのかを記述した研究⁵¹⁾、教師と子どもの経験から転換過程の学校を記述する試み⁵²⁾などがなされている。また特に近年、東ドイツ出身のキルヒフェーフェル(Kirchhöfer, D.)によって、子どもの生活や学校の日常などに関する心理学的な研究⁵³⁾や、子どものアイデンティティーに関する研究⁵⁴⁾などがなされてきている。

Ⅲ. 東ドイツ教育学の評価傾向 および今後の展望と課題

1. 東ドイツ教育学の評価傾向

ドイツ統一後における東ドイツ教育学の評価に関する研究動向は、このように大きく四つのテーマから整理することができる。その上で見えてくる、研究動向の時事的・時代的な傾向と、東ドイツ出身の研究者による研究動向と西ドイツ出身の研究者による研究動向との差異について言及したい。

まずドイツ統一直後においては、ドイツ統一以前から東ドイツ教育学の研究に携わってきた西ドイツ出身の比較教育学や教育史の研究者による研究が活発になされている。教育学の雑誌に目を向けると、東の『教育学と学校日常』誌においては統一直後から活発に東ドイツ教育学の評価についての論文が掲載されている。かたや西のドイツの教員組合の発行する『ドイツの学校』誌、そしてドイツ教育学会の発行する『教育学雑誌』においては、統一直後から東の雑誌ほどの反応ではないものの、統一以前から東ドイツ教育学研究に取り組んできた研究者による論文が中心に掲載されてきている。統一直後は、西ドイツでは統一以前からの研究者による研究が、東では発表手段は限られていたものの東ドイツの雑誌などを中心に活発に議論されている傾向が明らかになる。

その後、最初の本格的な論文集である『東ドイツ教育学の足跡』が1993年に出版されてから、1994年以降では東ドイツの研究者と西ドイツの研究者との共同研究が活発になる。それによって、東ドイツの研究者による評価研究も活発となる。また、公式文書の公開などともなって文書記録もまとめられて出版されるようになる。この1990年代の半ばは、その評価に関するテーマの幅も広く、発表される論文・著書も多い。

1990年代後半以降2000年代にかけては、数の面では全体的にはやや減少していくものの、その分テーマとしてはかなり細分化された研究があらわされている。特に、東ドイツ出身者の研究としては、ノイナーやアイヒラーのものをはじめとして、自身の専門分野に関する研究がまとめられて出版に至るといった傾向がみとれる。また、西ドイツ出身者の研究としてもクロアの論文集が1998年にまとめられ、「独裁」をテーマに研究してきた教育史研究者であるテノルト(Tenorth, H.-E.)の著書などがまとめられている。

この時代はすでに、東ドイツ出身の研究者にとっては、研究基盤が整っていなければなかなか研究発表することが難しかったといえる。その反面で、研究発表の基盤を有していた東ドイツの研究者の研究は、世紀

の転換期を契機としてむしろ活発になされてきている。例えば、ペンナーの計らいによってベルリン大学で研究活動を続けているアイヒラーや、ライプニッツ協会で研究交流を行っているノイナーやキルヒフェーフェルといった研究基盤が整っている研究者は、むしろ近年になって活発に出版活動を行っている。

2. 東ドイツ教育学を評価するための今後の展望と課題

わが国において東ドイツ教育学をこんにちどのように評価しなければならないのかということに関して、ドイツにおける研究動向から見えてくる展望と課題について述べたい。第一に、東ドイツ出身の研究者と西ドイツ出身の研究者との違いに目を向けることで、その異なった評価状況を見て取ることができるということが挙げられる。その上で、課題としては、東ドイツ出身者の中でも、教育学アカデミーに所属していた者や、大学の研究職にあった者など、その立場の違いも考慮しなければならないということがあげられよう。

第二に、学校教育というテーマに関わっては、学校教育を大きく規定した学習指導要領の理論に関する研究がほとんどなされてきていないということがみえてくる。東ドイツのレールプランは授業を構想する上での目標や内容だけではなく、その方法に至るまで細かく規定した学習指導要領である。東ドイツの教育家にとってはその構想にこそ東ドイツの教授学理論が実現しているという自負もあるであろうし、また同時に授業構想の形骸化の原因ともなったともいえるであろう。東ドイツの統一の学校教育制度を基盤として構想された学習指導要領をこんにちどのように評価するのかということが課題となる。また近年注目されているカリキュラムの国家基準という観点からも検討しなければならない課題である。

最後に、学校の内実に関わった伝記的研究によって、東ドイツにおける学校・教育の現実を見ることができるといことが挙げられる。ただしここでは、むしろ統一後に継承されず、否定されてしまったものにこそ、東ドイツ教育の特質があるのではないかという見方も必要であろう。統一以前は東ドイツ教育学を肯定的に受け入れてきたわが国においては、少なくともこのような三つの点から東ドイツ教育学を見ていくことが、今後の重要な課題となるであろう。

【註】

1) 深澤広明 (2004) 「ドイツ教授学の研究動向」日本教育方法学会編『教育方法33 確かな学力と指導法の探究』図書文化、135頁参照。

2) 天野正治ほか著 (1993) 『ドイツ統一と教育の再編』成文堂、天野正治・結城忠・別府昭郎編 (1998) 『ドイツの教育』東信堂、桂修治 (2003) 「ドイツ統一後の、東ドイツ地域の教育改革—ザクセン・アンハルト州のギムナジウムを中心として—」『徳島大学総合科学部言語文化研究』第10号、木戸裕 (1992a) 「統一後の東ドイツ教育の行方」『内外教育』時事通信社、木戸裕 (1992b) 「ドイツ統一と旧東ドイツ教育の再編 (上)」『レファレンス』499号、国立国会図書館調査立法考査局、木戸裕 (1992c) 「ドイツ統一と旧東ドイツ教育の再編 (下)」『レファレンス』500号、国立国会図書館調査立法考査局、木戸裕 (1992d) 「旧東ドイツ地域の新しい学校法—ザクセン州」『レファレンス』501号、国立国会図書館調査立法考査局、長島啓記 (1992) 「ドイツ統一と教育の再編」日本比較教育学会編『比較教育学研究18』、長島啓記 (1996) 「旧東ドイツ地域の教育の再編」日本比較教育学会編『比較教育学研究22』、吉澤昇 (1991) 「旧東ドイツ地域の教育改革」『世界』第559号など参照。

3) 大野亜由未 (2001) 『旧東ドイツ地域のカリキュラム変革—体制の変化と学校の変化—』協同出版、三村和則 (1996) 「統一ドイツにおける総合技術教育の研究と実践の現状—ブランデンブルク州を中心に—」『沖繩国際大学 文学部紀要 社会学科篇』第20巻、第2号など参照。

4) 宮崎俊明 (1990a) 「東ドイツ教育の終焉【I】—1989年 秋—」『鹿児島大学教育学部研究紀要』第42巻、宮崎俊明 (1990b) 「東ドイツ教育の終焉【II】—改革にむけて—」『鹿児島大学教育学部研究紀要』第42巻、宮崎俊明 (1992) 「東ドイツ教育の終焉【III】—研究手段の再起・転向・途絶—」『鹿児島大学教育学部研究紀要』第44巻、宮崎俊明 (1996) 「ドイツの教育研究の現況—1994年の研究者訪問と学会参加からみた—」『鹿児島大学教育学部研究紀要』第48巻、宮崎俊明 (2001) 「旧東ドイツ教育学アカデミー元総裁ゲルハルト・ノイナーとのインタビュー—その自己弁明と自己批判の歴史的検証—」『鹿児島大学教育学部研究紀要』第53巻など参照。

5) 船尾日出志 (1999) 『教科教授の法則性と人間性の教育—ドイツ民主共和国における哲学的教育学研究の反省的考察—』風間書房。

6) 山名淳 (1998) 「ベルリン・フンボルト大学の『清算』」木戸衛一編著『ベルリン 過去・現在・未来』三一書房。

7) Anweiler, O.(Hg.) (1990): *Vergleich von Bildung und Erziehung in der Bundesrepublik Deutschland*

- und in der Deutschen Demokratischen Republik. Köln Verlag Wissenschaft und Politik.
- 8) Anweiler, O.(Hg.) (1992): *Systemwandel im Bildungs- und Erziehungswesen in Mittel- und Osteuropa*. Berlin Verlag.
- 9) John, B.(1998): *Ideologie und Pädagogik: zur Geschichte der Vergleichenden Pädagogik in der DDR*. Böhlau Verlag.
- 10) Oberliesen, R./ Bastian, J./ Schulz, W./ Tillmann, K. (Hg.) (1992): *Schule Ost – Schule West*. Bergmann + Helbig Verlag.
- 11) · Hoffmann, D./ Neumann, K.(Hg.) (1994): *Erziehung und Erziehungswissenschaft in der BRD und der DDR. Band 1: Die Teilung der Pädagogik (1945–1965)*. Weinheim.
 · Hoffmann, D./ Neumann, K. (Hg.) (1995): *Erziehung und Erziehungswissenschaft in der BRD und der DDR. Band 2: Divergenzen und Konvergenzen (1965–1989)*. Weinheim.
 · Hoffmann, D./ Neumann, K. (Hg.) (1996): *Erziehung und Erziehungswissenschaft in der BRD und der DDR. Band 3: Die Vereinigung der Pädagogiken (1989–1995)*. Weinheim.
- 12) Cloer, E./ Wernstedt, R. (Hg.) (1994): *Pädagogik in der DDR. Eröffnung einer notwendigen Bilanzierung*. Deutscher Studien Verlag.
- 13) Döbert, H. (1995): *Das Bildungswesen der DDR in Stichworten: Inhaltliche und administrative Sachverhalte und ihre Rechtsgrundlagen*. Luchterhand.
- 14) Fuchs, H.-W./ Reuter, L. R. (1995): *Bildungspolitik seit der Wende: Dokumente zum Umbau des ost-deutschen Bildungssystems (1989–1994)*. Opladen.
- 15) Lenhardt, G./ Manfred, S. (1997): *Bildung, Bürger, Arbeitskraft. Schulentwicklung und Sozialstruktur in der BRD und der DDR*. Suhrkamp.
- 16) · Geißler, Gert/ Wiegmann, U. (1995): *Schule und Erziehung in der DDR: Studien und Dokumente*. Luchterhand.
 · Geißler, Gert/ Wiegmann, U. (Hg.) (1996): *Pädagogik und Herrschaft in der DDR*. Peter Lang.
 · Geißler, Gert (2000): *Geschichte des Schulwesens in der Sowjetischen Besatzungszone und in der Deutschen Demokratischen Republik 1945 bis 1962*. Peter Lang.
- 17) Benner, D./ Sladek, H.(1998): *Vergessene Theoriekontroversen in der Pädagogik der SBZ und DDR 1945–1961*. Deutscher Studien Verlag.
- 18) 中野光・三枝孝弘・深谷昌志・藤沢法暎 (1966) 『戦後ドイツ教育史』御茶の水書房, 59–81頁参照。
- 19) 例えば, 東ドイツ出身者の研究としては, Pehnke, A. (1992): Reformpädagogik - ein Stiefkind der pädagogischen Historiographie in der DDR. Anmerkungen zum Umgang mit der Reformpädagogik vor der „Wende“. In: Himmelstein/ Keim: *Jahrbuch für Pädagogik 1992*, Uhlig, C. (1994a): Reformpädagogik contra Sozialistische Pädagogik - Aspekte der reformpädagogischen Diskussion in den vierziger und fünfziger Jahren. In: Hoffmann/ Neumann(1994), a. a. O., Uhlig, C. (1994b): Zur Rezeption der Reformpädagogik in der DDR in den 70er und 80er Jahren vor dem Hintergrund der Diskussion um Erbe und Tradition. In: Cloer/ Wernstedt, a. a. O., などが挙げられる。また, 西ドイツ出身者の研究としては, Benner, D./ Kemper, H. (2005): *Theorie und Geschichte der Reformpädagogik. Teil 3. 1: Staatliche Schulreform und Schulversuche in SBZ und DDR*. Beltz Verlag, Röhrs, H./ Pehnke, A. (Hg.) (1994): *Die Reform des Bildungswesens im Ost-West Dialog: Geschichte, Aufgaben, Probleme*. Peter Lang, などが挙げられる。
- 20) Beutler, K. (1997): Zur Frage der marxistischen Methode in der Pädagogik. In: Gamm/ Koneffke: *Jahrbuch für Pädagogik 1997*, Gamm, H.-J. (1992): Perspektiven historisch-materialistischer Pädagogik nach dem Scheitern des „real existierenden Sozialismus“. In: Himmelstein/ Keim: *Jahrbuch für Pädagogik 1992*, Schepp, H.-H. (1994): Fortwirkende Elemente der Marxschen Bildungskonzeption. In: Hoffmann/ Neumann (1994), a. a. O..
- 21) Döbert, H. (1995): *Curricula in der Schule: DDR und ost deutsche Bundesländer*. Böhlau Verlag.
- 22) Häder, S./ Tenorth, H.-E.(Hg.) (1997): *Bildungsgeschichte einer Diktatur: Bildung und Erziehung in SBZ und DDR im historisch- gesellschaftlichen Kontext*. Deutscher Studien Verlag, Tenorth, H.-E./ Kudella, S./ Paetz, A. (1996): *Politisierung im Schulalltag der DDR. Durchsetzung und Scheitern einer Erziehungsambition*. Deutscher Studien Verlag.
- 23) Führ, C./ Furck, C.-L. (Hg.) (1998): *Handbuch der deutschen Bildungsgeschichte. Band IV 1945 bis zur Gegenwart. Zweiter Teilband Deutsche Demokratische Republik und neue Bundesländer*.

- Verlag C. H. Beck.
- 24) Himmelstein, K./ Keim, W. (Redaktion) (1992): *Jahrbuch für Pädagogik 1992. Erziehungswissenschaft im deutsch-deutschen Vereinigungsprozeß*. Peter Lang, Gamm, H.-J./ Koneffke, G. (Redaktion) (1997): *Jahrbuch für Pädagogik 1997. Mündigkeit. Zur Neufassung materialistischer Pädagogik*. Peter Lang, Keim, W./ Kirchhöfer, D./ Uhlig, C. (Redaktion) (2003): *Jahrbuch für Pädagogik 2002. Kritik der Transformation – Erziehungswissenschaft im vereinigten Deutschland*. Peter Lang.
- 25) Benner, D. (1993): Über die Aufgaben der Pädagogik nach dem Ende der DDR. In: *Zeitschrift für Pädagogik*. 39. Jahrgang, Benner, D./ Sladek, H. (1995): Bildungsziele zwischen affirmativer und reflektierender Lernzielnormierung. Vorüberlegungen zur Analyse von Konvergenzen und Divergenzen in ost- und westdeutschen Lehrplänen. In: Hoffmann/ Neumann(1995), *a. a. O.*
- 26) Cloer, E.(1998): *Theoretische Pädagogik in der DDR. Eine Bilanzierung von außen*. Deutscher Studien Verlag.
- 27) Klingberg, L. (1994): Zur Problematik des pädagogischen Begriffs „Führen“ in allgemeinen-didaktischer Sicht. In: Cloer/ Wernstedt, *a. a. O.*, D.-Münnich, U. (2002): *Pädagogische Führung und Erziehung – Selbsttätigkeit und Selbsterziehung. Zur Diskussion pädagogischer Grundkategorien, insbesondere in der Pädagogik der DDR*. Verlag Dr. Kovač.
- 28) この点については、拙稿 (2005) 「統一後ドイツから見た東ドイツ教授学の評価に関する一考察」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 (教育人間科学関連領域)』第54号、において検討している。
- 29) Reishock, W.(1994): Polytechnische Erziehung in der DDR. Ausgangsidee, Anfänge, Realisierungsprobleme. In: Hoffmann/ Neumann(1994), *a. a. O.*, Reishock, W. (1997): Polytechnische Bildung – eine unerledigte pädagogische Aufgabe. In: Gamm/ Koneffke, *a. a. O.*
- 30) Vgl., Neuner, G. (1973): *Zur Theorie der sozialistischen Allgemeinbildung*. Volk und Wissen.
- 31) Hausten H.-J. (2003): *Allgemeinbildung und Persönlichkeitsentwicklung: ein Beitrag zur Aufarbeitung der DDR-Pädagogik*. Peter Lang.
- 32) Neuner, G. (1996): *Zwischen Wissenschaft und Politik. Ein Rückblick aus lebensgeschichtlicher Perspektive*. Böhlau Verlag, Köln, Weimar, Wien. 同書は、西ドイツの比較教育学者ミッターの編集によって出版されることとなった著書であり、自伝的研究の立場で書かれている。Neuner, G. (1999a): *Ressource Allgemeinbildung? Neue Aktualität eines alten Themas*. Deutscher Studien Verlag, Weinheim. 同書に対する書評が、テノルトによって西ドイツの『教育学』(2001年)に掲載されている。Neuner, G. (1999b): *Allgemeinbildung – unzeitgemäß? Sitzungsberichte der Leibniz-Sozietät*. Band 31. Jahrgang 1999. Heft 4. trafo verlag, Berlin. 同書は、ノイナーの所属するライプニッツ協会から出版されている。
- 同書の表紙裏において、「ライプニッツ協会は、自然科学者・精神科学者・社会科学者の開放的なグループである。本協会はライプニッツ (Leibniz, G. W.) によって1700年に設立されたブランデンブルクの科学協会の伝統にたち、世紀を超えて絶え間なく選ばれた同僚や科学的影響が歴史的に関連づけられている。1993年にベルリンに本拠地を置いて構想された本協会は、われわれ同僚たちの自主的な研究を基盤とし、議論と出版のフォーラムを提供するものである。総会やクラスや研究グループにおいては、同僚たちやゲストが特に学際的な議論を行うとともに、実際の科学と社会の根本問題の論究を行う。本協会は、彼らの活動によってこんにちにおける精神生活に対して一定の貢献を果たすものと考え」と同協会に関する解説がなされている。ノイナーだけでなく、アイヒラーやキルヒフェーフェルといった東ドイツ出身の研究者もこの協会に所属し、研究活動を行っている。また、註33) のホフマンとキルヒフェーフェルによる『現代における一般陶冶』も、この協会の主催する研究会での議論を論文集として出版されたものである。
- 33) Hoffmann, D./ Kirchhöfer, D. (Hg.): *Allgemeinbildung in der Gegenwart*. Sitzungsberichte der Leibniz-Sozietät. Band 73. Jahrgang 2004. trafo verlag, Berlin.
- 34) Eichler, W. (1994): Zur methodologischen Diskussion in der DDR-Pädagogik während der zweiten Hälfte der 80er Jahre. In.: Cloer/ Wernstedt, *a. a. O.*, Eichler, W. (2000): *Der Stein des SISYPHOS*. LIT Verlag, Eichler, W.(2003): Diskurs in der Allgemeinen Pädagogik – unter Beteiligung von Ost und West? In: Keim/ Kirchhöfer/ Uhlig, *a. a. O.*
- 35) 宮崎 (1996), 前掲論文, 127頁。シジフォスはシシュフォスである。この「シシュフォスの石」はギ

- リシア神話の中の話であるが、日本でいう賽の河原の石積みである。
- 36) Coriand, R. (1994): Die Selbsttätigkeit des Schüler und die Führungsrolle des Lehrers – kritische Rückblick auf die Didaktikforschung der 80er Jahre in der DDR. In: Krüger, H.-H./ Marotzki, W. (Hg.): *Pädagogik und Erziehungsalltag in der DDR. – Zwischen Systemvorgaben und Pluralität*. Leske + Budrich, Opladen, Fuhrmann, E. (1997): Führung, Aktivierung und Selbsttätigkeit im Fachunterricht vor und nach der Wende. In: Keuffer, J./ Meyer, M. A. (Hg.): *Didaktik und kultureller Wandel. Aktuelle Problemlagen und Veränderungsperspektiven*. Deutscher Studien Verlag.
- 37) Klingberg (1994), a. a. O..
- 38) D.-Münnich (2002), a. a. O..
- 39) Leutert, H. (1993): Unterrichtsmethoden in der didaktischen Forschung der DDR: Überblick und Ausblick. In: A.-Amini, B./ Schulze, T./ Terhart, E. (Hg.): *Unterrichtsmethode in Theorie und Forschung. Bilanz und Perspektiven*. Beltz Verlag.
- 40) Rausch, E. (1993): Unterrichtliche Kommunikation und Kooperation. Didaktische Forschung an der Pädagogischen Hochschule Leipzig mit paradigmatischem Anspruch. In: Steihöfel, W. (Hg.): *Spuren der DDR*. Weinheim.
- 41) Bönsch, M. (1994): Von der Unterrichtslehre zur wissenschaftlichen Didaktik und deren Ausdifferenzierung. Die Entwicklung der Allgemeinen Didaktik in der BRD und in der DDR von 1945–1965. In: Hoffmann/ Neumann(1994), a. a. O..
- 42) Vgl., Cloer(1998), a. a. O., S. 73.
- 43) Steinhöfel, W.(Hg.)(1993): *Spuren der DDR-Pädagogik*. Deutscher Studien Verlag.
- 44) Kirchhöfer, D./ Neuner, G./ Steiner, I./ Uhlig, C. (Hg.) (2003): *Kindheit in der DDR. Die gegenwärtige Vergangenheit*. Peter Lang.
- 45) Kirchhöfer, D./ Merckens, H. (Hg.) (2005): *Vergessene Experimente. Schulversuche in der DDR*. Schneider Verlag, Hohengehren GmbH.
- 46) Geißler, G. (1996): Suchen und Wenden. Betrachtungen zur Abwicklung der Akademie der Pädagogischen Wissenschaften der Deutschen Demokratischen Republik en halbes Jahrzehnt danach, und ein zwangsläufig anmaßender Versuch. In: Hoffmann/ Neumann(1996), a. a. O., Kossakowski, A.(1992): Abwicklung der Akademie der Pädagogischen Wissenschaften. In: Himmelstein/ Keim, a. a. O..
- 47) Eichler, W./ Uhlig, C.(1996): Transformationen in der Pädagogik – das Beispiel 'Pädagogik und Schulalltag' zwischen 1990 und 1995. In: Hoffmann/ Neumann(1996), a. a. O..
- 48) Krüger, H.-H./ Marotzki, W. (Hg.) (1995): *Erziehungswissenschaftliche Biographieforschung*. Leske + Budrich, Opladen.
- 49) Krüger, H.-H./ Marotzki, W. (Hg.) (1994): *Pädagogik und Erziehungsalltag in der DDR*. Leske + Budrich, Opladen, Krüger, H.-H./ Kühnel, M./ Thomas, S. (Hg.) (1995): *Transformationsprobleme in Ostdeutschland. Arbeit, Bildung, Sozialpolitik*. Leske + Budrich, Opladen.
- 50) Brodbeck, M.(1992): *Zur Reflexion psychosozialer Konflikte durch Schuljugendliche*. Peter Lang.
- 51) Stock, M./ Tiedke, M. (1992): *Schüler erfahren die Wende: Schuljugendliche in Ostdeutschland im gesellschaftlichen Transformationsprozeß*. Weinheim und München.
- 52) Riedel, K./ Griwatz, M./ Leutert, H./ Westphal, J. (1994): *Schule im Vereinigungsprozeß: Probleme und Erfahrungen aus Lehrer- und Schülerperspektive*. Peter Lang.
- 53) Kirchhöfer, D. (1999): *Auswachsen in Ostdeutschland: Langzeitstudie über Tagesläufe 10- bis 14- jähriger Kinder*. Weinheim und München, Kirchhöfer, D. (2006): *Enttäuschte Hoffnungen. Reflektierte Selbstkommentierungen von Schülern in der Wende*. Juventa Verlag, Weinheim und München.
- 54) Hoffmann, D./ Neuner, G. (Hg.) (1997): *Auf der Suche nach Identität. Pädagogische und politische Erörterungen eines gegenwärtigen Problems*. Weinheim.

(主任指導教員 中野和光)